

抜け殻

東京都立成瀬高等学校 二年 前島 恵 まえじま めぐみ

落ちている抜け殻をひとつひとつ拾ってゴミ袋に入れていく。時折、無理やり袋に詰め込んだせいでぐしゃりと潰れる音がする。

街には今日もたくさんさんの抜け殻が落ちている。町田駅前のくるくる回るオブジェの周りなんかは、特に昼間人が行き交うせいで抜け殻の数が多い。だからいつもこの辺りを中心に抜け殻を集めるのだが、今日はいつもとよりやけに人が少ない。普段はよくいる路上ライブ中の若者もいなくて静かだ。

失恋したり試験に落ちたりして気力がなくなり、抜け殻状態になった人は、脱皮して本当に抜け殻を残していく。夜、その抜け殻を拾うのが私の仕事だ。拾った抜け殻はまとめてゴミ処理場に持っていくことになっている。

私の手で潰してしまいたい、と思った。いつもならゴミ処理場に持って行って大きな機械で潰されるこれらを、今日は自分の手で粉々にしてしまいたくなった。いつもより人が少なく静かだからだろうか。じめじめとした、センチメンタルな気分だった。

私は抜け殻が嫌いなのだ。抜け殻を生み出してしまうほど何かに夢中になったことも誰かを好きになったことも無い私は、脱皮した人たちが羨ましくて仕方なかった。この仕事を続けるうちに、羨望は嫌悪に変わった。いつかこの恨めしい抜け殻を自分の手で潰したいと思っていた。今まで抜け殻を拾いながら常に頭の片隅にあった願望をこれから叶えられると思うと胸が高鳴った。抜け殻をパンパンに詰め込んだ大きな袋を車の後部座席に乗せて家へと向かう。仕事を放棄して抜け殻を持ち帰る罪悪感すら今は心地良い。早く、早く家に着きたい。私の生き方を否定するようなこの抜け殻を、早く潰したい。

家について、リビングに抜け殻を広げる。腰に手を当てそれらを見渡してからそろそろと抜け殻に手を伸ばしつつ座り込む。適当に手に取ったひとつを握りしめてみる。すると呆気なくパリパリと音を立てながら手から欠片がこぼれおちていく。この上ない快感だった。ほかのものも夢中になって潰していく。両手でちぎってみたり握りこぶしで叩いてみたりする。潰していくうちに、夜の街で抜け殻を拾うあの嫌悪感が無かったことになっていくように徐々に体から力が抜けるのを感じた。

全てを潰し終えたとき、私の体にはもうほとんど気力が残っていなかった。手に張り付いた抜け殻の欠片をぼーっと見つめ、なけなしの力で抜け殻のついた手を舐める。そこからはさつ

市長賞
前島恵「抜け殻」

きまで無くなりかけていた気力が戻ったようだった。無心で潰された抜け殻を口に運んだ。口の周りに着くのも構わず食べ続けた。味はなかった。ただ、憎いこの抜け殻を自分の手で完全に無くしてしまうために食べ続けた。

食べ終えたとき、今度こそ私の体からは魂が抜けたように完全に気力が無くなっていた。燃え尽きて体を動かすことが出来なかった。

日本中にニュースが流れた。あるマンションの一室で抜け殻になった女が見つかったのだ。脱皮して残った抜け殻ではない。からだ本体が抜け殻になっていたのだ。そして、解剖された女の体からは大量の人の抜け殻が見つかった。

審査員講評

気力がなくなり「抜け殻状態」になった人は本当に抜け殻を残す、というアイデアが秀逸であるのはもちろんのこと、その抜け殻に対する主人公の感情の描き方、ストーリー展開、結末の情景など、どれをとってもお見事です。コンクールを超え、現代ショートショートのうち作品としても傑作の部類だと思います。

——
田丸 雅智